



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北大医短大部看護学生の生活感情の研究 : 揺籃期の第2期生・第3期生の場合
Author(s)	石塚, 百合子; 白佐, 俊憲
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 1, 33-44
Issue Date	1988-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37490
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_33-44.pdf



北大医短大部看護学生の生活感情の研究

—摇篮期の第2期生・第3期生の場合—

石塚百合子, 白佐 俊憲*

A Study on Feelings of Living of Nurse Students at the Dept. of Nursing, College of Medical Technology, Hokkaido University.

The 2nd Term (Class of 1982) and the 3rd Term (Class.
of 1983) Students in the Cradle Period of Our College

Yuriko Ishizuka and Toshinori Shirasa*

Abstract

Most of human experiences on livings are generally experiences of feelings. Psychiatric status of nurse students in the stage of late adolescence was studied in view of feelings of living through the emotional side of the living style in their 3 year college education.

Image study was carried out by S. D. method as the most reliable method of analysis for the 2nd and 3rd term students who were in the cradle period of our college.

Results: Existence of temporary and persistent, so called May disease was demonstrated.

Temporary May disease with marked reduction of primary rich feelings was seen in the students for 2 months after entry to the college.

Persistent May disease with continued lonely and empty feelings was also seen in the students for 10 months between July of the 1st term and April of the 2nd term. However, recovery from the persistent May disease was demonstrated with enforced feelings of solidarity, stability and richness as well as recovered feelings of living that had been impressed at the time of entry to the college in the

北海道大学医療技術短期大学部看護学科

*北海道女子短期大学初等教育学科

Department of Nursing, College of Medical Technology, Hokkaido University

*Department of Early Childhood Education, Hokkaido Women's Junior College

students for 1 year and 10 months between April of the 2nd term and February of the 3rd term.

From the viewpoint of score levels, this study showed a phenomenon of fluctuation with a trend of final balance.

要 旨

人間の多くの生活体験は感情的体験であるといわれている。発達段階で青年後期にある看護学生の心理状態を生活態度の情緒的側面である「生活感情」の面から、3年間の大学教育を受ける過程で、どのような変化がみられるか調査研究した。

対象は北海道大学医療技術短期大学部看護学科の揺籃期の2, 3期生, イメージを測定する方法として、最も有力なSD法を用いて行った。

その結果、入学後2カ月間は、特に高かった充実感の著しい減少が見られ、短期的五月病の存在が、また1年の6月から2年の4月までの10カ月間にも、連帯感・充実感の低下が見られ、長期的五月病の存在が裏付けられた。2年の4月から3年の2月までの22カ月間は逆転して連帯感・安定感・充実感が強まり、ほぼ入学時レベルの生活感情にもどり長期的五月病からの回復が認められた。得点水準によっても、平均化傾向をもった波動現象ともいえるべき存在が明らかになった。

1. はじめに

近年、大学・短大への進学率が高まり、昭和56年より専修学校から医療技術短期大学部に昇格した看護学科への受験競争は一層厳しいものとなってきている。この難関を突破した者は、大きな安堵感をもつと同時に、大学に対して様々な期待をもって入学する。彼らにとって学生生活は、授業・クラブ活動・社会活動・遊びなど、それまでの受験のための重苦しい生活とは違って、新鮮で、豊かで、自由なものである。

しかし、学生生活の現実とは、必ずしも彼らの期待通りではない。入学してしばらくすると授業が面白くない、生活に張りを見出せないなど、不満

や失望や戸惑いを感じ、アパシーな状態になり、何となく毎日を過ごすという者がでてくる。

看護学科は、将来の職業内容に直結する教育を行う学科であり、学生の進学動機がはっきりしていて、自分の専門に対するアイデンティティが不確かな者が少ないと考えられている。

しかし、大学の大衆化によって大学そのものが質的に変化し、看護学科の学生の意識や知的水準も同世代青年と異なるところが少なくなっている。過密なカリキュラムで臨床実習の比重の多い大学生活が、学生の勉学意欲を減退させ、無気力化を助長することも考えられる。

意識的に生活し、理性的に行動していると思われる我々の日常生活も、案外感情に支配され、その時の気分やムードに支配されているものである。

こうした看護学生の心理状態を、生活態度の情緒的側面である「生活感情」の面からとらえようとするのが、我々の一連の研究の目的である。

本研究は北海道大学医療技術短期大学部の揺籃期における看護学生の生活感情を、入学時点より卒業時点まで4時点で調査し、生活の感情の変化の程度・方向を明らかにしたものである。

2. 方 法

1) 「生活感情尺度」の構成

筆者らが作成した「生活感情尺度」は、オスグッドによって開発されたセマンティック・ディファレンシャル法 (semantic differential 略称SD法) 形式の30項目からなる質問紙である。

「生活感情尺度」は、①連帯－孤独尺度 (10項目)、②安定－不安定尺度 (10項目)、③充実－空虚尺度 (10項目) からなる (図1)。各項目はそれぞれ対になった形容詞 (例えば、にぎやかな－さみしい) で、与えられた刺激語・『現在の私』

を心に描き、自分のありのままの気持ちを、①非常ににぎやかな、②かなりにぎやかな、③ややにぎやかな、④どちらでもない、⑤ややさみしい、⑥かなりさみしい、⑦非常にさみしいの7段階のどこかに位置づけさせるものである。

調査票は、複数時点の比較や他資料と比較するために、記名法とした。分析的検討のため、所属学科、志望程度なども併せて記入させた。なおSD法の詳細は斉藤の報告¹⁾を参照されたい。

2) 対象および実施方法

北海道大学医療技術短期大学部看護学科の第2期生（昭和57年度入学）、第3期生（昭和58年度入学）の女子学生を対象とした。

実施時期は、第1回目は入学初期とし、入学当初の生活感情をとらえるために4月中旬に、第2回目は大学生生活の初期体験後の生活感情をとらえるために6月中・下旬に、第3回目は大学生生活の1年修了後の生活感情をとらえるために2年次の4月中旬に、第4回目は卒業を間近かにひかえた時期の生活感情をとらえるために3年次の2月に、それぞれ実施した。

有効対象数をなるべく多く確保して分析することと、結果を詳細にわかりやすく示す意図から、入学時から卒業時まで4回行った調査を、2時点（同一対象）の比較を中心に検討した。すなわち第1回目と第2回目（1年の4月と1年の6月：有効回答は150人）、第2回目と第3回目（1年の

6月と2年の4月：有効回答は120人）、第3回りと第4回目（2年の4月と3年の2月：有効回答は113人）であった。入学志望別対象者構成は表1に示す通りである。

3) 結果の処理

内容を分かりやすく整理し、統計的に検討するため、回答内容をすべて点数化する方法を採用した。

各項目のポジティブな方を左側に、ネガティブな方を右側に変転し、左側から各段階に7、6、5、4、3、2、1の評定点を与えた（図1参照）。すなわち、ポジティブな回答であるほど高い評定点になるようにした。

上述のように、三つの尺度はそれぞれ10項目からなる。したがって、各尺度は10～70の範囲の得点となる。ポジティブな方にもネガティブな方にも偏らない中央値（「どちらでもない」）は評定点が4であるので、尺度としての中央値は40点ということになる。

すべてを合算した全尺度合計は、3尺度（30項目）からなるので、30～210の範囲の得点となり、中央値は120点ということになる。

以上の様な点数化の上で、①看護学生全体および②得点水準について結果の分析・検討を行った。なお入学志望別も分析したが、ここでは学校も学科も第一志望の群のみ結果を述べることにする。

表1 対象者の入学志望別構成

入学志望 時 期	学校も学科も第一志望 (%)	学校は第一志望学科は第二志望 (%)	学校は第二志望学科は第一志望 (%)	学校も学科も第二志望 (%)	合 計 (%)
1年の4月～1年の6月	123 (82)	17 (7.3)	4 (2.7)	6 (4.0)	150(100)
1年の6月～2年の4月	102 (85)	9 (7.5)	4 (3.3)	5 (4.2)	120(100)
2年の4月～3年の2月	96 (85)	8 (7.1)	4 (3.5)	5 (4.4)	113(100)

北大医短大部看護学生の生活感情の研究



図1 生活感情尺度の尺度・項目の構成

表2 看護学生 (n=150) 全体の生活感情のイメージ

区分 尺度	1年4月時	1年6月時	平均値 の差	相 関 係 数	平均値の 差の 検定結果
	平 均 値 (標準偏差)	平 均 値 (標準偏差)			
連帯～孤独	46.53 (7.39)	45.55 (8.93)	-0.98	.619	N S
安定～不安定	45.40 (6.09)	44.41 (6.51)	-0.99	.376	N S
充実～空虚	51.18 (7.61)	48.16 (9.21)	-3.02	.533	***
全尺度 合 計	143.11 (16.81)	138.12 (21.84)	-4.99	.541	**

N. S. : 有意差なし

** : $P < .01$ で有意

*** : $P < .001$ で有意

表3 看護学生全体の全尺度合計の変化

変 化	1年6月～1年4月	人 数 (%)
減 少	～ -13	28 (18.67)
	-12 ～ - 8	16 (10.67)
	- 7 ～ - 3	25 (16.67)
不 変	- 2 ～ + 2	30 (20.00)
増 加	+ 3 ～ + 7	22 (14.67)
	+ 8 ～ +12	20 (13.33)
	+13 ～	9 (6.00)
合 計		150 (100)

積極的な生活感情の持ち主とみていると考えられる。

約2カ月を経過した6月の時点の看護学生の全尺度合計は132.12であり減少した結果となっている。統計的にみても有意差が認められる。表3に示すように個別的にみても、大きく減少している者が多い。筆者らが別に短期大学的女子学生 (n=879) に実施した結果²⁾では、入学時平均139.49となり、2カ月後の変化は、ごく僅かであるが増加しており、入学当初とほとんど変わらない生活感情であった。本調査では入学当初2カ月の変化は減少傾向を示し、ポジティブな傾向が弱まったといえる。

② 各尺度の変化

この結果を尺度別に検討してみると、表2に示すような内訳となっている。各尺度の中央値は40点であるから、いずれの尺度もややポジティブな方向にある。看護学生は自分を、周囲の人と連帯を保ち、心身が安定しており毎日の生活にも充実感をもっている、と評価している。

2カ月間の変化をみると、総計的に有意な差を伴って、充実～空虚尺度が減少している。つまり、入学当初の充実感が2カ月間の大学生活の結果、

3. 結果および考察

1) 入学当初2カ月間の変化

(1) 看護学校全体の生活感情の変化

① 全尺度合計の変化

表2に示すように、生活感情の全体像をあらわす全尺度合計は、入学直後の4月の時点では平均143.11である。「方法」で述べた中央値120点を基準にすると、看護学生全体の入学当初の生活感情はややポジティブな方向にあるといえる。すなわち、彼女らは自己観察を通して、自分を肯定的、

失われつつあるといえる。

2時点の相関は、連帯－孤独尺度で最も高い結

表4 高・平均・低得点群の2カ月の差

(1年6月～1年4月)の平均値及び標準偏差

対象群 尺 度	高得点 群 ① (n=27)	平均得 点群② (n=25)	低得点 群 ③ (n=14)
全尺度合計	-15.41 (17.56)	+1.32 (13.08)	+2.07 (14.18)
連帯～孤独	-4.33 (5.86)	+2.48 (6.01)	-2.07 (8.19)
安定～不安定	-3.30 (7.74)	+0.52 (5.14)	+3.57 (5.46)
充実～空虚	-7.78 (8.70)	-1.68 (5.36)	+0.57 (7.09)

(注) 平均得点 ① 158点以上 ② 136～143点
③ 121点以下

果となっている。

③ “五月病”の検討

新入生に現われるとされる短期的な五月病は、新入生が大学生活を1～2カ月送ったところで、大学に抱いていた期待と現実とのギャップに気づいたり(期待感が失望感・幻滅感に変わる)、新しい生活や勉強になじめなかったり(緊張感・不適応が高まる)した結果生じる、と説明されている。一般的に五月病が存在するとすれば、充実－空虚尺度の得点が減少する。本調査は、まさに五月病の存在を裏付ける結果が得られたといえる。受験勉強をし期待をもって張り切って大学生活を始めただけに、現実の学生生活にはむなしさを感じずにはおれないのであろう。

在学している学校・学科が志望通りの入学であったかどうかによって、大学生活に対する期待や気構え、また実際に大学生活を送っての感じ方、受

表5 増加・不変・減少群の平均値及び標準偏差

対象群 尺 度	時 点	増加群① (n=9)	不変群② (n=30)	減少群③ (n=28)
全尺度合計	1年4月	138.11 (10.76)	139.9 (14.12)	148.10 (20.73)
	1年6月	159.11 (9.18)	140.27 (14.22)	114.90 (23.88)
連帯～孤独	1年4月	44.56 (5.62)	45.03 (6.68)	48.75 (7.60)
	1年6月	51.89 (5.13)	46.17 (5.97)	38.54 (11.13)
安定～不安定	1年4月	45.00 (3.30)	45.47 (4.77)	45.96 (8.65)
	1年6月	51.11 (4.38)	45.77 (5.20)	38.07 (5.92)
充実～空虚	1年4月	48.56 (5.27)	49.4 (6.31)	53.39 (9.07)
	1年6月	56.11 (3.45)	48.33 (6.01)	38.29 (9.46)

(注) ① +13点以上 ② +2～-2点 ③ -13点以下 (表3参照)

けとめ方も違うであろう。今回、全対象者の8割以上をしめる（学校も学科も第一志望で入学してきた）意欲的な学生に、入学間もなく充実感の著しい減少という生活感情の変化が生じていた。短期的な五月病様症状に陥る学生が学校も学科も第一志望の学生に多いということは問題視して受けとめる必要があるだろう。

（2）得点水準からみた変化

4月時点の看護学生全体の全尺度合計点を高得点群・平均得点群・低得点群に分けて、4月から6月への変化の内訳を調査した。3群の編成基準は次の通りであった。

① 高得点群……4月の時点で、全尺度合計が158点以上であるもの。

② 平均得点群……4月の時点で、全尺度合計が143～136点であるもの。

③ 低得点群……4月の時点で、全尺度合計が121点以下であるもの。

これらの群について、4月と6月との間の変化（6月－4月）の平均値を算出したのが表4である。この表から、高得点群は得点が減少し、低得点群は得点が増加する傾向が確認された。高得点群の場合、とくに充実－空虚尺度の減少が大きい

ことがうかがえる。

さらに全尺度合計の変化を中心に、次の基準で増加群・不変群・減少群に分けた。

① 増加群……2カ月間の変化（6月－4月）が18点以上であるもの。

② 不変群……2カ月間の変化が＋3～－3点であるもの。

③ 減少群……2カ月間の変化が－18点以下であるもの。

4月の時点及び6月の時点の平均値を算出したのが表5であるが、この表からも明確な傾向を指摘出来る。4月時点の得点水準は、増加群は低く、不変群は平均に近く、減少群は高いことである。

6月の時点になると、増加群と減少群の得点水準が逆の関係になっている。すなわち、全尺度合計でも各尺度でも、4月の時点で得点の高かった者では、入学後2カ月間の生活によって生活感情のポジティブな側面が弱まり、逆に得点の低かった者ではポジティブな側面が強まったといえるだろう。

このような変化がなぜ起こったのか、今後さらに検討を加え、分析していく必要があるだろう。

表6 看護学生（n=120）全体の生活感情のイメージ

区 分 尺 度	1年6月時	2年4月時	平均値 の 差	相 関 係 数	平均値の 差の 検定結果
	平 均 値 (標準偏差)	平 均 値 (標準偏差)			
連帯～孤独	45.69 (7.91)	44.50 (8.13)	－1.18	.681	*
安定～不安定	43.75 (5.76)	43.65 (5.98)	－0.10	.435	N S
充実～空虚	48.35 (7.62)	46.25 (8.19)	－2.09	.570	**
全尺度 合 計	137.80 (18.75)	134.40 (19.60)	－3.39	.607	*

N.S.:有意差なし * : $P < .05$ で有意 ** : $P < .01$ で有意

2) 1年の6月から2年の4月までの10カ月間の変化

(1) 看護学生全体の生活感情の変化

① 全尺度合計の変化

表6に示すように、生活感情の全体像をあらわす全尺度合計は、1年の6月時137.80、2年の4月時134.40である。中央値120点を基準にすればややポジティブな生活感情にあるといえるが、1年の6月時から2年の4月時への変化は、減少傾向を示しており、統計的にも有意な差となっている。入学時と2年の4月とを比較すると約9点弱の減少があり、ポジティブ(肯定的・積極的)な傾向が弱まっているといえる。

② 各尺度の変化

尺度別にみると、表6が示すように、いずれの尺度も減少し、連帯～孤独、充実～空虚尺度で有意な差を伴って減少している。2年の4月では、1年の6月よりも、学生は、にぎやかな、協力的な、うちとけた、指導力のある、集団的な、明るい、楽しい、喜ばしい、充実した、あたたかな、満ちたりた、成長していくという感情を弱めているといえる。特に充実～空虚尺度で著しい。したがって、全尺度合計で認められた減少は、連帯感、充実感を弱める形で生活感情のネガティブ化がおこったといえる。

このように、連帯感、充実感を弱める変化がみられたということは、長期的にとらえる“五月病”が存在すると考えられる。

表2の入学時の充実～空虚尺度と2年の4月時を比較すると約5点弱の減少があり、充実感が失われつつある変化がみられる。

全尺度合計の変化をみると、減少傾向の学生が増加傾向の学生よりかなり多いことが分かる(表7)。

学校も学科も第一志望で入学してきた意欲的な学生に、入学後間もなく生活感情の変化が生じ、それが2年の4月の時期においても、充実感の減少という形をとって継続していることが分かった。

以上の検討から、長期的な五月病様症状に陥っ

表7 看護学生全体の全尺度合計の変化

変 化	2年4月～1年6月	人 数 (％)
減 少	～-13	18 (15.00)
	-12～- 8	19 (15.83)
	- 7～- 3	26 (21.67)
不 変	- 2～+ 2	29 (24.17)
増 加	+ 3～+ 7	5 (4.17)
	+ 8～+12	8 (6.67)
	+13～	15 (12.50)
合 計		120 (100)

表8 高・平均・低得点群の10カ月の差
(2年4月～1年6月)の平均値及び標準偏差

対象群 尺 度	高得点 群 ① (n=16)	平均得 点群② (n=27)	低得点 群 ③ (n=25)
全尺度合計	- 9.63 (13.66)	- 6.00 (10.08)	+ 5.28 (18.84)
連帯～孤独	- 2.63 (5.49)	- 1.59 (5.60)	+ 1.52 (6.97)
安定～不安定	- 2.69 (3.69)	- 1.81 (4.37)	+ 2.8 (7.02)
充実～空虚	- 4.31 (6.66)	- 2.59 (6.45)	+ 0.96 (7.13)

(注) 平均得点 ① 158点以上 ② 136～143点
③ 121点以下

ている学生が、学校も学科も第一志望である者に多いということが明らかになった。

(2) 得点水準からみた変化

入学当初の2カ月間の変化をみた時と同様な方法で、1年の6月時点の看護学生全体の全尺度合計点を高得点群・平均得点群・低得点群に分け、1年の6月と2年の4月との間の変化(2年の4月～1年の6月)の平均値を算出したのが表8である。この表から、高得点群では得点が減少し、

表9 増加・不変・減少群の平均値及び標準偏差

尺 度	対象群 時 点	増 加 群 ① (n=15)	不 変 群 ② (n=29)	減 少 群 ③ (n=18)
全尺度合計	1年6月	117.67 (16.54)	135.52 (19.55)	141.94 (15.76)
	2年4月	144.33 (16.39)	135.66 (19.12)	112.67 (19.43)
連帯～孤独	1年6月	40.27 (9.90)	44.31 (8.91)	47.28 (6.24)
	2年4月	47.53 (8.19)	44.59 (8.32)	36.39 (7.61)
安定～不安定	1年6月	36.53 (4.36)	43.41 (4.69)	44.83 (4.79)
	2年4月	47.33 (4.81)	44.52 (4.95)	37.89 (6.39)
充実～空虚	1年6月	40.87 (6.05)	47.79 (7.72)	49.83 (7.03)
	2年4月	49.47 (6.21)	46.55 (7.74)	38.39 (8.01)

(注) ①+13点以上 ②+2～-2点 ③-13点以下 (表7参照)

表10 看護学生 (n=113) 全体の生活感情のイメージ

区 分 尺 度	2年4月時	3年2月時	平均値 の 差	相 関 係 数	平均値の 差の 検定結果
	平 均 値 (標準偏差)	平 均 値 (標準偏差)			
連帯～孤独	44.38 (8.32)	46.21 (7.76)	+ 1.82	.517	*
安定～不安定	43.39 (6.36)	45.31 (6.15)	+ 1.92	.349	**
充実～空虚	46.48 (8.50)	49.00 (8.36)	+ 2.52	.500	**
全尺度 合 計	134.25 (20.44)	140.52 (20.02)	+ 6.27	.469	**

*: P<.05で有意 **: P<.01で有意

低得点群では得点が増加した。平均得点群では、
わずかであるが減少傾向の変化が確認された。こ
こでも高得点群に、充実～空虚尺度の顕著な減少
が認められた。
入学当初の2ヵ月間の変化をみた時と同様な方
法で、増加群・不変群・減少群に分けて1年の6

月の時点及び2年の4月の時点の平均値を算出したのが表9である。この表からいえることは、1年の6月の得点水準は、増加群は低く、不変群は平均に近く、減少群は高いことである。2年の4月の時点になると増加群と減少群の得点水準がちょうど逆の関係になっている。全尺度合計でも各尺度でも、1年の6月の時点で得点の高かった者はその後の生活で生活感情のポジティブな側面を弱め、逆に得点の低かった者はポジティブな側面を強めていたといえるだろう。つまり平均化傾向をもった波動現象とでもいうべき変化があったと考えられる。

3) 2年の4月から3年の2月までの22カ月間の変化

(1) 看護学生全体の生活感情の変化

① 全尺度合計の変化

表10に示すように、生活感情の全体像をあらわす全尺度合計は、2年の4月時134.25、3年の2月時140.52である。中央値120点を基準にすれば、ややポジティブな方向にある。この変化は、増加傾向を示しており、入学時から2年の4月時への変化とちょうど逆方向であった。統計的にも有意な差となっている。卒業間近になると、看護学生は自分を肯定的、積極的にとらえるようになるということができるだろう。表11に示したように、得点が大きく増加している者が多い。

② 各尺度の変化

尺度別にみると、表10が示すように、いずれの尺度も増加し、3尺度とも有意な差を伴って増加している。とくに充実-空虚尺度で著しい。したがって、全尺度合計で認められた増加は、充実感が著しく強まり、連帯感・安定感も強める形で生活感情のポジティブ化がおこったといえるだろう。

このような生活感情のポジティブ化は、生活の大きな転機（卒業）により、長期的な五月病による落ち込みからの回復（波動現象としては上向きの変化）を意味しているといえるのではないだろうか。

表11 看護学生全体の全尺度合計の変化

変 化	3年2月～2年4月	人 数 (%)
減 少	～-13	11 (9.73)
	-12～- 8	10 (8.85)
	- 7～- 3	15 (13.27)
不 変	- 2～+ 2	13 (11.50)
増 加	+ 3～+ 7	20 (17.70)
	+ 8～+12	16 (14.16)
	+13～	28 (24.78)
合 計		113 (100)

表12 高・平均・低得点群の22カ月の差
(3年2月～2年4月)の平均値及び標準偏差

対象群 尺 度	高得点 群 ① (n=10)	平均得 点群② (n=19)	低得点 群 ③ (n=25)
全尺度合計	- 5.60 (13.30)	- 0.21 (16.18)	+ 24.4 (21.30)
連帯～孤独	- 0.60 (4.10)	0.00 (6.99)	+ 7.40 (7.54)
安定～不安定	- 2.70 (4.96)	- 0.11 (4.93)	+ 8.04 (7.96)
充実～空虚	- 2.30 (5.80)	- 0.11 (6.63)	+ 8.96 (7.93)

(注) 平均得点 ① 158点以上 ② 136～143点
③ 121点以下

各尺度の2年の4月から3年の2月への増加量は、1年の4月から6月への減少量にほぼ相当する。すなわち減少の大きかった充実感・安定感・連帯感の順で、大きく増加している。全体的に入学時に近い状況に回復した得点となっているのが分る。一般的には卒業時点でポジティブ化が認められると考えられているが、今回もそれを裏づけるような結果となった。このポジティブ化が3年間の学業を終えた時点の心情を表わしている

表13 増加・不変・減少群の平均値及び標準偏差

尺 度	対象群 時 点	増加群① (n=28)	不変群② (n=13)	減少群③ (n=11)
全尺度合計	2年4月	113.68 (22.76)	144.85 (12.28)	147.46 (11.52)
	3年2月	146.89 (20.63)	145.15 (11.72)	114.55 (14.22)
連帯～孤独	2年4月	35.64 (7.79)	49.08 (6.29)	49.55 (3.63)
	3年2月	47.50 (8.07)	48.62 (7.01)	39.09 (5.66)
安定～不安定	2年4月	37.68 (7.14)	46.77 (3.60)	45.91 (5.00)
	3年2月	47.61 (6.25)	46.54 (2.93)	36.55 (4.91)
充実～空虚	2年4月	40.36 (9.47)	49.00 (6.70)	52.00 (6.81)
	3年2月	51.79 (8.60)	50.00 (4.95)	38.91 (6.17)

(注) ①+13点以上 ②+2～-2点 ③-13点以下 (表11参照)

といえよう。

志望別にみても、学校も学科も第一志望で入学してきた意欲的な学生に、統計的に有意な増加が認められた。

(2) 得点水準からみた変化

入学当初の2カ月間の変化をみた時と同様な方法で2年の4月時点の得点群を分け、2年の4月と3年の2月との間の変化(3年の2月-2年の4月)の平均値を算出したのが表12である。この表から、高得点群に得点の減少傾向、低得点群に得点の増加傾向が確認された。なかでも低得点群の増加量が多いことは注目される。

増加群・不変群・減少群に分けて2年の4月の時点及び3年の2月の時点の平均値を算出したのが表13である。この表からも前述の期間でみられたような平均化傾向をもった波動現象ともいえるべき変化が認められる。また増加群の対象者数が著しく増加しているのも分かる。

4 おわりに

以上、看護学生を対象に、2時点間の比較で検討を試みた。そして、次に要約するようなことが明らかになった。

1) 入学当初2カ月間の変化

① 看護学生全体の生活感情は、低下している。

② 尺度別にみると、充実感の著しい減少という変化が認められ、これは短期的“五月病”の存在を裏付けた。また短期的な五月病様症状に陥る学生は、学校も学科も第一志望の学生に多いことが明らかになった。

③ 4月時点の得点水準によって変化の方向が異なり、高い得点であった者には減少傾向が、低い得点であった者には増加傾向が認められた。つまり平均化傾向をもった波動現象とでもいえるべき変化が認められた。

2) 1年の6月から2年の4月までの10カ月間の変化

① 1年の6月時点でややポジティブであった生活感情は、2年の4月の時点ではポジティブな傾向が失われつつあった。

② 尺度別にみると、連帯感・充実感が失われつつあり、これは、長期的な“五月病”の存在を裏付けているものと思われる。また学校も学科も第一志望の群に特に著しい充実感の減少傾向が認められ、意欲的な学生ほど長期的な“五月病”に陥る可能性が高いものと思われる。

③ 波動現象の存在についても確認された。

3) 2年の4月から3年の2月までの22カ月間の変化

① 2年の4月時点でポジティブな傾向が弱められつつあった生活感情は、3年の2月の卒業時点で再びポジティブ化が認められた。

② ポジティブ化は3つの尺度全体に認められ、連帯感・安定感・充実感を強めた結果となった。長期的五月病からの回復、波動現象の存在を裏付けるものであると考えられる。とくに学校も学科も第一志望の群に明確なポジティブの傾向が認められた。

以上、2時点の比較を中心に検討してきたが、これには、有効対象数なるべく多く確保して分析することと、結果を詳細にわかりやすく示す意図があった。今後は、全時点で資料が得られた者に限って全体を通しての変化の方向と程度を分析確認し、調査研究を継続していきたいと考えている。また、対象者数が減少した中には、2期生14人、3期生12人の異動学生が含まれている。これらの学生の中には、入学志望別にみると学校も学科も第一志望の意欲的な学生が少なくない。これらの学生は、波動現象の振幅が大きいのか、長期的五月病様症状がみえるのか等、様々な理由が考えられる。今後は異動学生にも焦点をあてて、事例的に細かくみることにより、その傾向を知り、異動者本人の問題にのみ帰するのではなく、本学の教育のあり方、学生指導について再考するため

の資料にしていきたいと考えている。

(謝辞)

何回にもわたって実施した調査に、真面目に協力してくれた学生諸君に、また心暖まる御配慮を下さった和田龍彦先生に心から感謝の意を表します。

引用文献

- 1) 斉藤耕二：SD法による生活感情の研究，依田新編：現代青年の人格形成，157-168，1979，金子書房，東京
- 2) 白佐俊憲・水谷一郎・石塚百合子：女子学生の生活感情の研究（Ⅱ），北海道女子短大研究紀要，第16号，55-68，1982.

参考文献

- 1) 石塚百合子・白佐俊憲：看護学生の生活感情の研究，入学初期2カ月間の変化，北海道看護教育研究会会報，第14-3，22-30，1987.
- 2) 石塚百合子・白佐俊憲：看護学生の生活感情の研究（続報），北海道看護教育研究会会報，第15-1，38-43，1987.
- 3) 伊藤暁子・遠藤恵美子・関根龍子他：看護学生の生活と看護教育に対する考え方，看護実践の科学，第10-3，17-42，1985.
- 4) 小比木啓吾：アイデンティティ（大原健士郎・岡堂哲雄編）思春期・青年期の異常心理113，1980，新曜社，東京
- 5) 水谷一郎・白佐俊憲・石塚百合子：女子学生の生活感情の研究（Ⅴ），北海道女子短大研究紀要，第19号，93-105，1985.
- 6) 白佐俊憲・水谷一郎・石塚百合子：女子学生の生活感情の研究（Ⅱ），北海道女子短大研究紀要，第16号，55-68，1982.
- 7) 白佐俊憲・水谷一郎・石塚百合子：看護婦志望学生の生活感情の研究，看護教育，24巻2号，104-107，1983.